第7回 日本消化管Virtual Reality学会 参加報告

小樽掖済会病院　佐藤 哲太

皆様、こんにちは。小樽掖済会病院の佐藤 哲太（さとう てった）です。

1月18日（土）ハートンホテル京都（京都府京都市）で第7回日本消化管Virtual Reality学会総会・学術大会が開催されました。日本消化管Virtual Reality学会は、消化管CT研究会と消化管Virtual Endoscopy研究会が一つになり2018年に発足した学会です。毎年1月ごろに総会・学術大会が開催されています。第7回総会・学術大会では、琵琶湖大橋病院 消化器内科の田中先生を大会長とし、「木を見て、森も見る。」というテーマのもと様々な発表、講演が行われました。

私は、独自開発している人工知能技術を活用した大腸CT検査における読影支援システムの精度報告を行いました。私たち技師とは違う立場の内視鏡医や病理医から精度向上に繋がる可能性のあるご意見をいただき大変ありがたかったです。ほかの一般演題では、無症候性メッケル憩室の3D所見など、普段の大腸CT検査（CTC）では経験することの少ない症例を見ることができ、とても貴重な機会でした。特別講演では、札幌厚生病院 病理診断科の市原先生による「CTC読影に役立つ大腸上皮性病変の病理」についてのお話がありました。市原先生はとても面白く、楽しい講演でした。内視鏡画像と病理画像、CTCの画像を用いて様々な病理所見を教えていただき、今後の読影に大変参考になる内容でした。ランチョンセミナーでは、浄光寺の住職である藤澤先生によるお話がありました。仏教・仏陀のお話から、仏教からみる「いのち」と医療からみる「いのち」のお話、それらの関係についてなど、普段聞くことのできない貴重な講演を拝聴することができました。

午後のシンポジウムでは、「大腸がん診療 ～現在の動向と新たな展開～」という内容で京都府立医科大学の吉田先生、済生会熊本病院の満崎先生、国立がんセンター中央病院の三宅先生、当院の平野技師長による講演が行われました。前処置の話や昨今話題のAI技術についてなど、高名な先生方による貴重なお話を聴くことができました。平野技師長からはAquilion Precisionを用いた高分解能画像のお話があり、これからのCTCの方向性を示した報告でした。私自身、超高精細CTを扱うことのできる施設で働くことができ、大変恵まれているとますます実感しました。症例検討では、三宅先生と舘林記念病院の岩宗先生による読影と市川先生の病理解説が行われました。読影のスピードが速く、それでいてかなり正確だなという印象でした。また、仮想内視鏡像（VE）や多断面再構成画像に仮想内視鏡像を合成した画像（VE+MPR）を駆使し

て、ある程度のタイプ分類や病理予測を行っている様子を見て、かなりハイレベルな話だなと感じてしまいました。私自身、普段の業務で大腸内腔の読影を行っていますが、このレベルには到達できていませんので、より一層努力していきたいと思います。

この学会に何度か参加してみて、消化管 CT 検査に関する知識や大腸内腔の読影、内視鏡画像に関する学びを深め、スキルを磨くことができたと思います。今後も機会があれば参加させていただき、更なる知識・技術の向上を目指したいです。次回は、当院の平野技師長が大会長となり、小樽で開催されることになりました。消化管 CT に関する知識を身につけたい方や知識を深めたい方、興味のある方はぜひ参加してみてはいかがでしょうか。